

第3章 武蔵野市の生物多様性の現状

1 武蔵野市の自然環境の基本的事項

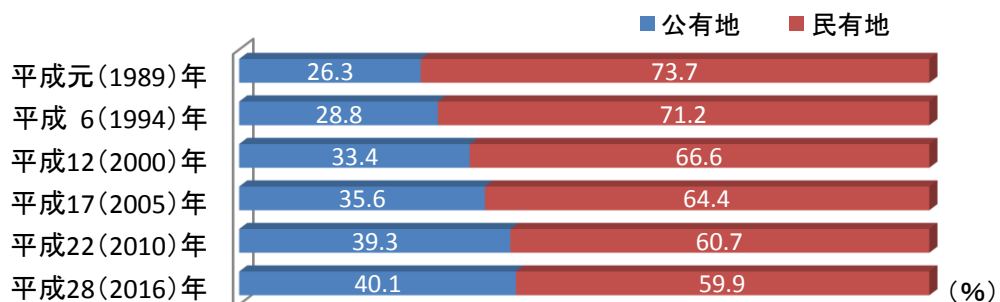
- 市域は東西 6.4km、南北 3.1km に広がり、面積は 10.98 km²です。
- 標高 50～65m のおおむね平坦な地形で、山や海はありません。
- 分厚いローム質（火山灰質）の表層を持つ武蔵野台地の上にあり、下層には豊富な地下水が流れています。
- 夏季多雨多湿、冬季少雨乾燥の太平洋側気候で、関東平野南部の一般的な気候と言えます。ただし、主にヒートアイランド現象と地球温暖化の影響で、東京都全体で明治 38（1905）年から平成 20（2008）年までの間に、平均気温は 3.1℃上昇しています（東京都環境局「暑くなる東京」）。
- 緑被率（市域面積に対する緑の割合）は 24.3%（平成 28 年度）で、種類としては公園、大学、上水沿いの緑、街路樹、農地、住宅の庭木等があります。緑の約 6 割が民有地にあるため、市民の育てる緑に依存している状況と言えます。
- 用水路としての役目を終えた玉川上水、千川上水に下水の高度処理水を流して水辺空間をつくっています。池沼環境については、市内にはほとんどありませんが、市境に近い三鷹市の井の頭池、杉並区の善福寺池があります。

【緑被率とは】

市域面積に対する緑の割合のことです。本市では、樹木地（樹木に覆われた部分）・草地（農地以外の平面的な緑）・農地（畑・果樹園等）・屋上緑化（屋上部において草木類等に覆われた部分、平成 28 年度のみ）の面積の合計を緑被地面積とし、これを市域面積で割ったものを緑被率としています。なお、裸地（グラウンド等の土の部分）・水面（浄水場・河川等）は、緑被地面積の対象外です。

【武蔵野市の緑の公有地・民有地内訳】

下のグラフの通り、本市の緑は、公有地（公園等）に比べて民有地（住宅の庭木等）が多くなっています。しかし、開発行為や維持管理の負担等により民有地の緑は減少傾向にあり、これに伴い公有地の割合が大きくなってきています。



2 武蔵野市の生物多様性を明らかにするための3つの視点

ここでは、「歴史」、「地域」、「生物種」の3つの視点から、武蔵野市の生物多様性がどのようなものであるのかを明らかにしていきます。

(1) 歴史から見る武蔵野市の生物多様性

①先史時代

太古の武蔵野市の自然環境がどのようなものであったのかは、正確にはわかりません。ただし、井の頭池の北側を中心に、旧石器時代から縄文時代にかけての石器や土器等が多数出土していることは、そこにあった豊かな水環境が人々を惹きつけた証ではないかと考えられます。



御殿山遺跡で見つかった石器・土器

②広大な原野

奈良時代になると、武蔵野の広大な原野が文献に登場します。また、平安時代になると、原野の名草としてムラサキの記述も見られます。広大な原野の成り立ちについてはわからないことも多いですが、もともと森の多かったところで、焼畑農業や家畜の放牧を繰り返したことが関係していると言われています。



『武蔵野図屏風』

江戸時代によく描かれたモチーフで、江戸時代より前の武蔵野の広大な原野を表わしています(写真提供:東京国立博物館)。

③雑木林の利用

江戸時代になり、玉川上水と千川上水が完成すると、人口が大きく増加し、原野の切り開きが進むとともに、クヌギやコナラを中心とする雑木林が積極的につくられるようになりました。雑木林は落ち葉を堆肥として利用する他、木を切って薪や炭として燃料にしました。街道沿いに家、畑、雑木林が立ち並ぶ伝統的な武蔵野らしい風景が出来上がったのは、この頃のことです。

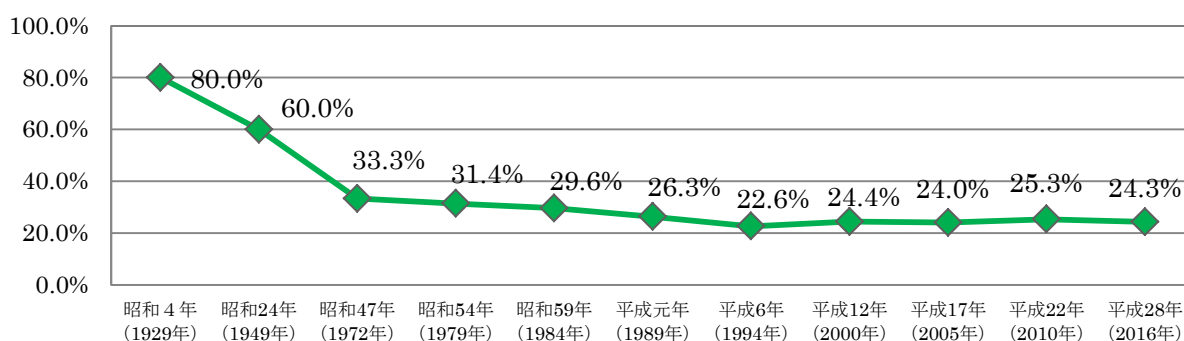


江戸時代の土地利用のイメージ

吉祥寺村、西窪村、関前村では、五日市街道を挟み、家・畑・雑木林の3つが短冊状に並んでいました。

④人口の増加と自然環境の減少

この武蔵野らしい風景に変化をもたらした大きなきっかけは、大正 12（1923）年の関東大震災です。被害の大きかった都心部の人々が武蔵野へ移住したことにより人口が激増し、吉祥寺駅を中心に市街地化が一気に加速しました。このようにして、農地や雑木林は宅地に置き換わっていきます。その後も人口は、太平洋戦争末期の疎開等による一時的な減少を除けば、徐々に増加していき、これに伴い農地や雑木林を中心に自然環境は減少の一途を辿ります。緑被率で言えば、昭和 4（1929）年には約 80％だったと思われるものが、近年は約 25％に減少しています。



緑被率の推移

⑤市民・行政の連携による自然環境の再生

しかし一方で、環境保全の気運の高まりとともに、自然環境の再生に向けた動きも活発化します。本市では昭和 46（1971）年の第一期長期計画から「緑のネットワーク計画」を掲げ、他自治体に先駆けて自然環境の保全に取り組んできました。中でも、市民と行政の連携による事例が数多くあります。

昭和 46（1971）年には、緑化施策に関して提言する機関として、市民参加による緑化市民委員会が発足しました。八幡町の米軍宿舎跡地（旧中島飛行機武蔵製作所跡地）には、できるだけ人の手を加えない「原っぱ」を強く望む市民の声を受けて、平成元（1989）年、武蔵野中央公園が開園しました。平成 10（1998）年に開園した木の花小路公園は、本市で初めて市民参加のワークショップを経てつくられた公園であるだけでなく、市民団体による公園管理の先例ともなりました。

水については、昭和 40 年代後半（1970 年代前半）頃から、用水路としての役目を終えて流れが途絶えていた玉川上水に清流を復活させようとする市民活動が活発化し、昭和 61（1986）年に下水の高度処理水を流すことで清流が復活しました。同じく流れが途絶えていた千川上水にも、平成元（1989）年に清流が復活し、また昭和 62（1987）年には、市民の強い意向で神田川の親水化工事が実現しました。

【文学に残る武蔵野の自然】

武蔵野の自然環境の歴史を知る手がかりの一つとして、ここでは文学作品に注目します。

◆詠人知らず『万葉集』（7世紀後半～8世紀後半）

武蔵野の草は諸向き^{もろ} かもかくも 君がまにまに^あ 吾は寄りにしも

⇒「武蔵野の草があちらこちらを向くように、私はあなたの心のままに寄り添うのに」という意味の恋の歌で、草の生い茂っていた当時の様子がわかります。万葉集は「武蔵野」という単語が初めて現れる史料です。

◆菅原孝標女^{すがわらのたかすえのむすめ}『更級日記』（11世紀）

むらさき生ふと聞く野も、蘆・荻^{あし おぎ}のみ高く生ひて、
馬に乗りて弓もたる末見えぬ^{すえ}まで高く生ひ茂りて

⇒「(染料や生薬として貴重な)ムラサキが生い茂ると聞いていた野も、アシ、オギばかりが高く生えていて、馬に乗って弓を持てば先が見えないほど高く生えていて」という意味で、当時の武蔵野の植生が垣間見えるとともに、ムラサキに対する価値観も表れています。

◆俗謡（江戸時代）

武蔵野は 月の入るべき 山もなし 草より出でて 草にこそ入れ

⇒「武蔵野では、月は隠れるような山もないので、草から現れて草に隠れる」という意味です。江戸時代に庶民に親しまれた俗謡と言われており、原野時代の武蔵野の情景をよく表しています。江戸時代は人口増に伴って原野が失われていった時代なので、そのことを惜しんで詠まれたのかもしれない。

◆国木田独歩『武蔵野』（明治31（1898）年）

昔の武蔵野は萱原^{かやはら}のはてなき光景をもって絶類の美を鳴らしていたようにいい伝えてあるが、今の武蔵野は林である。林はじつに今の武蔵野の特色といってもよい。

⇒江戸時代の開発により原野がほとんど失われ、かわりに林が武蔵野の特徴的な風景になったことがわかります。国木田独歩は上記の文章のあと、日本人はもともと林の美しさをあまり知らないとしつつ、林が四季ごとに見せる美しさを綴っていきます。

◆太宰治『ヴィヨンの妻』（昭和25（1950）年）

池のはたの杉の木が、すっかり伐り^き払われて、何かこれから工事でもはじめられる土地みたいに、へんにむき出しの寒々した感じで、昔とすっかり変わっていました。

⇒井の頭公園についての記述です。この寒々しい光景は、太平洋戦争中、棺桶を作るために、井の頭公園のスギの木が大量に伐採されたことによります。今では井の頭公園と言えばサクラのイメージがありますが、かつてはスギも多く、緑の種類が時代とともに変化していることがわかります。

【昔の写真から見る武蔵野市の自然】

■ 吉祥寺駅周辺



【左：昭和 30 年代後半（1960～65 年ごろ） 右：平成 28（2016）年】

吉祥寺駅周辺は最も早い時期に、そして最も高度に市街地化が進んだ地域ですが、昭和 30 年代後半（1960～1965 年ごろ）の時点で相当の開発が行われており、自然環境が多くないことがわかります。ただし、写真左上の五日市街道付近にある緑は、月窓寺、光専寺等の樹林で、現在も残っています。

■ 玉川上水



【左：昭和 29（1954）年、中央：昭和 59（1984）年、右：平成 28（2016）年】

玉川上水は江戸時代初期に上水道として完成しました。昭和 40（1965）年に役目を終えて水流が途絶えましたが、昭和 61（1986）年には周辺住民の積極的な運動が実り、下水の高度処理水を流すことで清流が復活しました。中央の写真では水が流れていないことがわかります。

（２）地域から見る武蔵野市の生物多様性

本市には、井の頭公園や小金井公園といった大規模公園を**大拠点**、中小規模の公園や大学のまとまった緑等を**中拠点**、家庭の庭木や壁面・屋上緑化等を**小拠点**とし、玉川上水、千川上水、街路樹、緑道等を**生態的回廊**とする**生態系ネットワーク**があります。

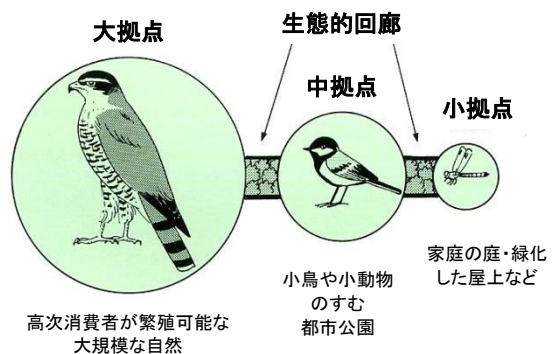
このような市全体の生態系ネットワークを前提に、3 駅圏を基準として、地域ごとの生物多様性の特徴を示します。



【生態系ネットワークについて】

緑や水辺等の自然を拠点として、緑道や河川等の回廊でつなぐことを**生態系ネットワーク**と言います。

生態系ネットワークを有効に構築すると、地域の生物多様性が豊かになるため、自然環境を守り、つくるときは、このことを強く意識する必要があります。



生態系ネットワークのイメージ

(出典:「ビオトープネットワーク」(公財)日本生態系協会)

【武蔵野市の土地利用について】

武蔵野市はもともと吉祥寺村、西窪村、関前村、境村の4村に分かれていました。吉祥寺村、西窪村、関前村の3村は、五日市街道を挟んで短冊状に宅地と畑地等の整備が行われたため、地割は整形なものになりました。一方、境村は玉川上水の拡幅工事人や保谷村の農民たちがそれぞれに開発した結果、地割は不整形なものになりました。この地割は現在も名残をとどめており、それぞれの地域を特色づける要素の1つになっています。

① 吉祥寺地域

概 要

吉祥寺駅周辺は市内で最も市街地化が進んでいるため、公園は比較的少なく、農地も北西部にわずかに残るのみですが、駅近くには約43万㎡の広大な井の頭公園がある他、五日市街道沿いの社寺林や成蹊学園のけやき並木等のまとまった緑があり、主に樹林環境を中心に一定の自然環境が確保されています。また、井の頭公園、東京女子大学、立教女学院、善福寺公園、立野公園といったまとまった緑が市境にまたがっている、もしくは市境付近にあることも特徴です。

地域における代表的・特徴的な自然環境

- | | | |
|---------------------|------|------|
| ● 井の頭公園 | 樹林環境 | 池沼環境 |
| ● 社寺林 | 樹林環境 | |
| ● 成蹊学園（けやき並木） | 樹林環境 | |
| ● 街路樹（井ノ頭通り、吉祥寺通り等） | 樹林環境 | |
| ● 玉川上水 | 樹林環境 | 水辺環境 |
| ● 神田川 | 水辺環境 | |

井の頭公園

生きものについて

正式には、「井の頭恩賜公園」と言います。井の頭池があるため、樹林環境と池沼環境がセットで存在していることが特徴です。また、井の頭公園を中心に、西部方向には玉川上水、東部方向には神田川があり、生態系ネットワークの大拠点としての役割が期待されます。希少な生きものとしては、ヒラタクワガタやウスバカミキリ、アオダイショウ等の樹林性の生物や、林床環境を好むキンラン、カイツブリやカワセミといった水辺の鳥、モノサントンボといった水生昆虫類等が確認されています。さらに、平成28（2016）年に実施された井の頭池のかいぼりでは、昭和32（1957）年に井の頭池で発見された新種の水草で、絶滅したと思われていたイノカシラフラスコモが約60年ぶりに発見されました。ただし、井の頭池について、その湧水は都市化による減少が進んでおり、またペットだったものが捨てられたと思われる緊急対策外来種のミシシippアカミミガメも多数確認されているため、積極的な対策が必要です。



文化・精神的側面について

井の頭池は豊かな湧水により、先史時代から現代まで人々の暮らしに恵みをもたらしてきました。江戸時代には池の西側に徳川将軍家の鷹狩りのための屋敷があったとされており、これが「御殿山」の語源にもなったと言われています。花見やボート、テニス等の各種レジャー・スポーツの機会も充実しており、また動物園、美術館が併設されていることから、教育・芸術の発信地でもあります。

緑と水のマップ



【凡例】

	水と緑の軸		施設緑地(都市公園等)		低層住宅地の良好な緑環境の保全・整備ゾーン
	緑の軸(緑道)		緑の拠点(学校・公共施設)		中高層住宅地の良好な緑環境の保全・整備ゾーン
	緑のネットワーク(街路樹・並木)		緑の拠点(社寺・大規模敷地)		商業・業務地及び住商複合地の良好な緑環境の保全・整備ゾーン
	緑の拠点(にぎわい)		保存樹木 (大木・シンボルツリー・2000計画指定樹木)		
			保存樹林		

【「武蔵野市緑の基本計画2008」の方針図を引用】

② 中央地域

概 要

地域の南端を玉川上水が、北端を千川上水がそれぞれ東西に流れており、水辺環境をつくっています。また、北部を中心に、まとまった緑、連続した緑が存在します。とりわけ、むさしの市民公園や武蔵野中央公園において比較的規模の大きい樹林環境と草地環境がセットで存在していることや、関前公園の池が市内では貴重な池沼環境をつくっていることが特徴です。西部を中心に農地も見られます。

地域における代表的・特徴的な自然環境

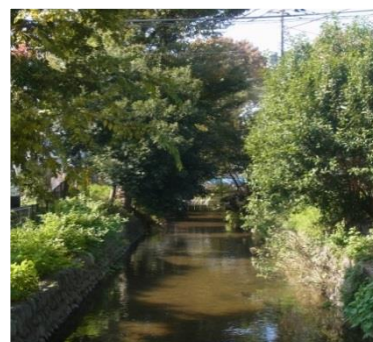
● 玉川上水	樹林環境	水辺環境
● 千川上水	樹林環境	水辺環境
● 武蔵野市役所（むさしの市民公園含む）	樹林環境	草地環境
● 武蔵野中央公園	樹林環境	草地環境
● 関前公園	樹林環境	池沼環境
● 街路樹（中央通り、井ノ頭通り、三鷹通り、伏見通り等）	樹林環境	
● グリーンパーク緑地	樹林環境	草地環境
● 八幡町、関前の農地	農地環境	

玉川上水

生きものについて

市域南部を横断するように流れており、多くの生きものの移動経路になっています。上流の羽村から水辺環境が連続しているため、広い視点で生物多様性を考えるにあたり特に重要な場所です。また、飲み水を供給する上水として周辺を含めて保護されてきた歴史があるため、手つかずの自然が一部残っていることも特徴です。植物

については、中央地域にはムクノキやケヤキが多いですが、その他の地域では種類が大きく異なります。鳥類については魚食性のコサギが確認されており、希少な昆虫としてハグロトンボも確認されています。ただし、侵略的植物として重点対策外来種に指定されているトウネズミモチも確認されており、注意と対策が必要です。



文化・精神的側面について

上水沿いは散歩道として人々に利用されています。また、歴史的価値のある土木施設として国から史跡に指定されている他、清流の復活に市民活動が大きく寄与している経緯もあるため、本市の歴史にとって重要な場所でもあります。平成28（2016）年には、玉川上水とその分水網における保全・啓発活動等が、日本ユネスコ協会連盟による「プロジェクト未来遺産2016」に登録されました。

緑と水のマップ



【凡例】			
	水と緑の軸		施設緑地 (都市公園等)
	緑の軸 (緑道)		緑の拠点 (学校・公共施設)
	緑のネットワーク (街路樹・並木)		緑の拠点 (社寺・大規模敷地)
	緑の拠点 (にぎわい)		保存樹木 (大木・シンボルツリー・2000計画指定樹木)
			保存樹林
			低層住宅地の 良好な緑環境の保全・整備ゾーン
			中高層住宅地の 良好な緑環境の保全・整備ゾーン
			農・住共存地の 良好な緑環境の保全・整備ゾーン
			商業・業務地及び住商複合地の 良好な緑環境の保全・整備ゾーン
			木造住宅密集地域の 良好な緑環境の保全・整備ゾーン

【「武蔵野市緑の基本計画2008」の方針図を引用】

③ 武蔵境地域

概 要

武蔵境駅の北側は、小金井公園や境山野緑地といった公共のまとまった緑がある一方、農地や大規模マンションの敷地内の木々といった民有地の緑も多いのが特徴です。また、玉川上水、千川上水、仙川を含む地域で、水辺環境も充実しています。この地域でも、吉祥寺地域と同様に小金井公園や武蔵野大学といった緑の拠点が市境にまたがっている、もしくは市境付近にあります。市民が「農」に親しむことのできる農業ふれあい公園や、ドッグランを併設した武蔵川公園といった特色のある公園もあります。

地域における代表的・特徴的な自然環境

● 小金井公園	樹林環境	草地環境
● 境山野緑地	樹林環境	
● 街路樹（井ノ頭通り、公団通り、境南通り等）	樹林環境	
● 玉川上水	樹林環境	水辺環境
● 千川上水	樹林環境	水辺環境
● 仙川	水辺環境	
● 関前、境の農地	農地環境	

小金井公園

生きものについて

樹林環境と草地環境がセットで存在していることに特徴があります。また、近くには玉川上水と仙川があるため、生態系ネットワークの大拠点としての役割が期待されます。希少な生きものとしては、アオゲラやヒラタクワガタ等の樹林を利用する生き物の他、樹林と草地の組み合わせを好むモズ等が確認されています。なお、小金井市側には人間の立ち入ることができないバードサンクチュアリとして雑木林があり、豊かな生物多様性が育まれています。ただし、園内の池では、井の頭池と同様、緊急対策外来種であるミシシippアカミミガメが確認されており、積極的な対策が必要です。



文化・精神的側面について

大きな原っぱがあるため、ピクニックや子どもの遊び場等、多目的なレジャーに利用することができます。また、桜の名所であり、花見のシーズンには特に賑わいます。武蔵野市側にはスポーツ施設も充実しています。大部分がバードサンクチュアリとなっている雑木林は、都内では少なくなった武蔵野の面影をできる限り残すための管理が行われています。

緑と水のマップ



【凡例】			
	水と緑の軸		施設緑地 (都市公園等)
	緑の軸 (緑道)		緑の拠点 (学校・公共施設)
	緑のネットワーク (街路樹・並木)		緑の拠点 (社寺・大規模敷地)
	緑の拠点 (にぎわい)		保存樹木 (大木・シンボルツリー・2000計画指定樹木)
			低層住宅地の 良好な緑環境の保全・整備ゾーン
			中高層住宅地の 良好な緑環境の保全・整備ゾーン
			農・住共存地の 良好な緑環境の保全・整備ゾーン
			商業・業務地及び住商複合地の 良好な緑環境の保全・整備ゾーン

【「武蔵野市緑の基本計画2008」の方針図を引用】

（３）生物種から見る武蔵野市の生物多様性

本市では平成 12 年度、22 年度、26 年度に生物生息状況調査を実施しており、この中で特にデータが充実している植物、昆虫類、鳥類の 3 つから、武蔵野市の生物多様性の特徴を示します。

なお、ここではあくまで上記 3 回の調査の中で確認された生きものについて記述するものであって、本市の現在の生物生息状況を完全に示すものではありません。

※ 3 回の調査については、32 ページ「本市の生物生息状況を把握するために用いた資料」もご覧ください。

①植物

調査において確認された植物は、花壇等から抜け出したと考えられる種や、人が持ち込んだ種も含めると 264 種となりました。

環境省や東京都（北多摩地域）のレッドリスト（絶滅のおそれのある野生生物のリスト）に掲載されている種に注目すると、春に森林の地表に美しい花を咲かせるニリンソウやキンランは、かつては雑木林でごく普通に見ることができましたが、都市化による樹林の減少とともに少なくなっています。水辺に生育するカワヂシャは、川岸等の湿った場所に生育しますが、河川の工事により消失する事例も報告されている種です。希少なチョウ類であるジャコウアゲハの食草であり、希少植物でもあるウマノスズクサについても、除草剤の散布等により各地から姿を消しつつある種です。一方で、セイタカアワダチソウやハリエンジュ等、92 種もの外来種が記録されています。



キンラン

（写真：（公財）日本生態系協会）

②昆虫類

調査において確認された昆虫類は、外来種も含めると 1,389 種となりました。

環境省や東京都（北多摩地域）のレッドリストに掲載されている種も 172 種を数えます。希少な種としては、良好な水辺環境に生息するハグロトンボ、キイトンボ、モノサシトンボ等のトンボ類、都市部では数が減少しているとされるクツワムシやスズムシ等のバッタ類、肉食性の水生昆虫であるゲンゴロウの仲間やガムシの仲間、多様な樹種の存在を思わせるスジクワガタ、ヒラタクワガタ、ノコギリカミキリ等の甲虫類等が記録されています。雑木林のエノキを幼虫時代に食べるヒオドシチョウ、オオムラサキ等の貴重なチョウ類も記録されています。また、卵で越冬し、年に一度だけ出現する樹上性のシジミチョウ科のチョウの一群であるゼフィルスは、ウラゴマダラシジミ、アカシジミ、ウラナミアカシジミ、ミズイロオナガシジミ、オオミドリ



ハグロトンボ

（写真：（公財）日本生態系協会）

シジミの5種が記録されています。ゼフィルスが育つには雑木林の若い樹木が重要で、若い樹木は人間が雑木林を利用する中で現れることから、ゼフィルスの存在は人と自然の共生の証しとも言われています。ここに挙げた昆虫類は、年を追うごとに近隣の地域から減少傾向が報告されている種でもあるため、今後の生息動向が注目されます。

③鳥類

調査において確認された鳥類は、留鳥（一年を通して生息している鳥）、繁殖鳥（夏鳥）、越冬鳥（冬鳥）、渡り鳥等を含め41種が確認されました。環境省や東京都（北多摩地域）のレッドリストに掲載されている種も10種を数えます。注目種を挙げると、アオゲラやエナガ等のまとまった樹林に生息する種、魚類のいる水辺でないと生息できないカワセミ、周辺に樹林環境のある池沼環境に生息するオシドリが記録されています。一方で草原に生息する種の記録は非常に乏しく、農地や河川敷に普通に生息するヒバリの記録がない等、草原環境の少なさ、あるいは減少が伺えます。なお、樹林に生息し、主に昆虫類を食べるアオゲラやエナガについては、冬季だけの一時的な記録にとどまっており、市内では繁殖に至っていないものと考えられます。なお、外来種については、全国的に広がっているドバトの他、もともとペットとして飼われていたと思われるセキセイインコやワカケホンセイインコが確認されています。



カワセミ

（写真：（公財）日本生態系協会）

市内の調査（平成12・22・26年度）で確認された生きもの

分類群	種数	希少種数	外来種数	備 考
植 物	264	9	92	77 科 264 種 希少種：キンラン、カワヂシャ等 外来種：トウネズミモチ、セイタカアワダチソウ、ハリエンジュ、セイヨウタンポポ等
昆虫類	1389	172	8	247 科 1389 種 希少種：ゲンゴロウ、ウラギンスジヒョウモン等 外来種：アオマツムシやチャバネゴキブリ等
鳥 類	41	10	3	23 科 41 種 希少種：コアジサシ、エナガ等 外来種：ドバト、セキセイインコ、ワカケホンセイインコ
哺乳類	2	0	0	アズマモグラ・アブラコウモリのみ
両生・爬虫類 ・水生動物	20	17	11	11 科 20 種 希少種：ニホンイシガメ、トウキョウダルマガエル等 外来種：ミシシippアカミミガメ、ウシガエル等

3 武蔵野市の生物多様性のポイント

これまで見てきた「歴史」、「地域」、「生物種」の3つの視点から、武蔵野市の生物多様性の強み・機会と弱み・課題をまとめると、以下のようになります。

(1) 強み・機会として捉えることができる点

◆ 人間と自然が共生していること

本市の自然環境は、主に公園や大学の中の緑、上水、街路樹、住宅の庭木等であるため、人間との関わりの中で育まれている都市型の自然環境と言えます。人間と他の生きものたちの暮らしが適切に融和することは、それぞれにとって暮らしやすさの向上につながると考えられます。

◆ 生態系ネットワークを構築するための原型があること

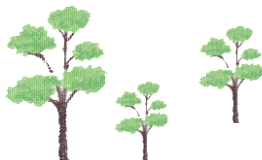
市民と行政の一体的な取り組みの成果として、井の頭公園や小金井公園といった大規模公園を大拠点、中小規模の公園等を中拠点、家庭の庭木や壁面・屋上緑化等を小拠点とし、玉川上水、千川上水、緑道、街路樹等を生態的回廊とする生態系ネットワークの原型がすでに形成されています。今後はさらにネットワークを充実させる必要がありますが、生きもののすみかと移動経路がすでにかたちになっていることは、本市の強みと言えます。

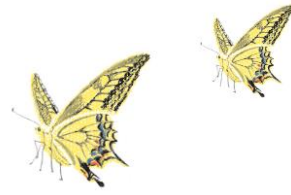
◆ 自然環境の保全について市民等の活力があること

武蔵野市の緑の約6割は民有地の緑に支えられています。また、武蔵野中央公園や木の花小路公園の開設の経緯、玉川上水、千川上水の清流復活、神田川の親水化工事等の事例からわかる通り、市民の活力により自然環境が保全・創出されてきた歴史があります。今でも市民団体・事業者・大学等が自然環境に関して積極的に活動しています。生物多様性は行政の施策だけでなく、市民の主体的な行動に支えられるものであるため、このことは大きな強みと言えます。

◆ 生物多様性の文化・精神的サービスが充実していること

武蔵野の美しい自然の情景は、時代ごとにかたちを変えて数々の文学に描かれてきましたが、今でも公園や大学の中の緑、上水沿い等の自然は人々の暮らしに文化・精神的なうるおいを与えています。また、自然の中でのレジャーやスポーツの機会が充実し、自然に関連した教育・芸術施設もあります。このような生物多様性の文化・精神的サービスが充実していることは、人々の生物多様性に対する取り組みの動機につながるものと考えられます。





(2) 弱み・課題として捉えなければならない点

◆ 自然環境が量的に減少、質的に低下していること

人口増加に伴う市街地化やライフスタイルの変化等により、民有地の緑の減少による緑被率の低下や、井の頭池の湧水の減少、侵略的な外来種の繁殖等、自然環境は量的に減少、質的に低下の傾向があり、これに伴い生物多様性も脅かされています。また、生態系を破壊しかねないヒートアイランド現象や地球温暖化といった気候変動も進行中です。今後は人間と自然の共生を念頭に置きながら、これ以上の自然環境の減少を食い止め、また自然環境を再生する必要があります。

◆ 自然環境の種類や存在する地域に偏りがあること

相対的に樹林環境が多く、池沼環境や草地環境が少ないと言えます。また、駅周辺商業地に自然環境が少ないこと、東側地域に広い公園が少ないこと、西側地域に農地が集中していること等、地域的な偏りもあります。このような状態を前提に、生物多様性の保全を進める必要があります。

◆ 侵略的な外来種が地域本来の生物多様性を脅かしていること

過年度に実施した生物生息状況調査では、外来種が多数確認されています。とりわけ、ペットだったものが捨てられたと思われるミシシippアカミミガメやインコ科の鳥が目立つのは、都市的特徴の1つと言えます。外来種のうち、侵略的な外来種は地域の生物多様性を脅かすおそれがあるため、注意し、必要に応じて対策しなければなりません。

◆ 他自治体や都、市外各教育機関との連携が不可欠であること

井の頭公園と小金井公園は、本市の生態系ネットワークの大拠点となる規模の大きな自然環境ですが、いずれも他自治体にまたがっており、また都立公園です。同様に玉川上水、千川上水も市境を流れ、他自治体にまたがっている、といった特徴があります。その他、東京女子大学、立教女学院、武蔵野大学といった緑の拠点となる教育機関が市境の他自治体側に位置しています。このため、生態系ネットワークの維持・向上のために、他自治体や東京都、市外各教育機関とよく連携することが不可欠です。